

Title	ナバテア王國の成立について
Sub Title	On the rise of Nabataean Kingdom
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1961
Jtitle	史学 Vol.33, No.3/4 (1961. 4) ,p.167(425)- 188(446)
JaLC DOI	
Abstract	<p>The social and economic development of the Nabataean community is one of the most striking facts in the Hellenistic Near East. The present paper specializes in the fundamental causes of their sedentarization which came after the nomadic life and of their making of a powerful kingdom, by utilizing Ibn Khaldun's social theory about "badawah" and "hadarah", especially about "asabiyah", which can be applied in their history. As main sources are used texts of Diodorus, Josephus, Strabo, and reports on the recent excavations of Negeb. Diodorus' description shows these people in 312 b. c., according to which they jealously continued their nomadic life without houses and also other peculiarities of sedentary cultures, very similar to the Rechabites of the OT. This kind of life also may be similar to that of mere "necessities" in Khaldun's theory, strongly attached to "asabiyah" by blood ties and tribal prescription. Therefore we cannot call this process of a community "kingdom". At the same time they far surpassed other neighbouring tribes in wealth, because they were accustomed to caravan trade of precious Arabian goods. It is true that this trade peculiar to them made them accumulate enough wealth to establish a kingdom, and in their history commercial influence is superior to agricultural one and such appreciation of the latter by some writers fails to expose the basic causes of their sedentarization. In short, The Nabataean society of 312 b. c. was a period of transition to "hadarah". Strabo, relying mainly upon contemporary sources, describes the already established kingdom of the Nabataeans, in which they lead civilized sedentary life, requiring "conveniences" and even "luxuries"-a sign of a state in Khaldun's theory, but some-what restrained from old power of "asabiyah", which means the continuity in the development of the tribal community since 312 b. c. It is possible to regard the relaxation of tribal bases of a society, originated from "asabiyah", as a mark of the existence of an organized state presided by a king. From this point of view, it is true that their kingdom was consolidated between the late second century and the Roman conquest of the districts around Syria by Pompey the Great.</p>
Notes	史学科開設五十周年記念
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19610400-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ナバテア王國の成立について

小川 英雄

ヘレニスティック世界の中でのオリエント諸民族の歴史は、漠然とギリシャ文化による一種の文明開化のようなものとして扱われている。方法からいっても、各民族文化のうちで“Hellenization”を受けた部分を取り出してそれ等を合計し、故にヘレニズム文化の影響が偉大であったと結論する容易で非科學的な方法が行われて來た。もし、ヘレニスティック世界を客觀的に扱うのであれば、從來のようにヘレニズムの光の當つた部分だけを見てはならず、オリエント諸民族の歴史のそれぞれについてヘレニスティック時代に該當する部分を見るのではなくてはならない。そして、各民族のこの時代の動きを、その社會の史的發展に即して、しかもヘレニスティック世界の全體の發展との關係の下に把握して初めて、ヘレニスティック世界の意味が客觀的に分る。このような見方によつて、

ヘレニスティック時代のナバテア人社會の發展の原因を検討することが以下の研究の目的である。

一 ナバテア人の社會發展の基礎

ナバテア人が一遊牧民の狀態から王國を作るに至るのはヘレヘニティック時代初期以後だから、ここで扱う問題はヘレニスティック時代史の一つである。しかし、このことはナバテア人の發展がギリシャ文化のお陰であるということを意味しない。それはディアドコイの諸王朝やローマを中心とする西方世界の社會的經濟的興隆の要請に東方が應ずるといふこの時代の根本的な運動の中で現われたのは勿論だが、原因でない。そのような要請はナバテア人自身の社會的要因を通してだけその社會の發展に働きかける。それ故、先ずヘレニスティック世界の入口でナバテア人の社會がその發展の如何なる段階にあつたか、それが次の段階に移行する様子はどうかであつたか、という順に考察すべきである。

「ナバテア人は定住地帯に居つてアラビア遊牧民の典型的な例を示す。そこにナバテア人を引き寄せたものはその隊商貿易だつた⁽¹⁾」といわれる通り、ナバテア人のヘレニスティック時代の發展は隊商貿易を軸とした遊牧生

活から定住生活への發展である。この時代にナバテア人は南はメディンサリ、北はダマスクスに至る定住、遊牧兩地帶を含んだ王國を建設する。しかし、遊牧民と定住耕作者の對立關係だけについていえば、それはセム人世界の主要な特徴である。⁽²⁾この關係を初めて社會學的に考察したのが、イブン・ハルドゥンの歴史哲學である。

ハルドゥンによると、人間の社會は最低の必要物で生活する沙漠社會 (“badāwah”) と都市文化による定住社會 (“hadārah”) の二つの形態を持つ。前者は(一)農耕をも行う小村落、山間地の社會、(二)沙漠周邊の放牧生活の社會、(三)沙漠の中でラクダと生活を共にするアラビア社會に分類され、(三)は「存在する限りの最も野蠻な人間」の世界である。ここにいうアラビア人 (“Arab”) とは、沙漠の中でテント生活を送っている者と云う意味で、⁽⁴⁾ハルドゥンは人種・民族・言語上の差別なしに社會學的用語として使つた。⁽⁵⁾そして、ベドゥイン (“Badāwah” から出た語) は一年の大部分を沙漠で過し、ラクダ等の飼育で生活する遊牧民であり、⁽⁶⁾ハルドゥンの場合には更に都市の外で耕作する村落民をも含む。⁽⁷⁾ギリシ

ヤ・ローマの著述家の中では、このような段階のアラビア人は “skēnitai” (天幕居住者)、或は “kamēroboskoi” (ラクダ飼育者) として現われ (cf. Str., XVI, 4, 2)、ディオドルスは「ナバテア人の(他にもアラビアの部族がいて、そのいくつかは土地を耕しさえする。そして、シリア人と同じ風習 (i. e. 沃地的風習) を持ち、貢物を拂う (i. e. 自由でない) 人々と混つてゐるが、家に住まない (i. e. 天幕に住む) だけが違ふ (XIX, 94, 9)」と傳えている。⁽⁸⁾

ハルドゥンはこういう沙漠生活が部族の發展の段階として時間的に、定住した都市文化に “prior” であると認めるが、⁽⁹⁾ではどうしてこの移行が生ずるのか。ハルドゥンは「生活條件の改良と必要以上の富や快樂の獲得」⁽¹⁰⁾とか富の増大などを擧げるが、何故それが可能かと云ふ點については十分な考察を行つていないようである。その理由は、定住した都會生活の生計を與えるものとしてだけ文化的技能 (crafts) と商業が考えられて、⁽¹¹⁾これ等の社會的發展を考えないことであらう。人間の欲求は社會的要因を通して實現する。ハルドゥンの歴史哲學で、典型として捕えられた沙漠・都市兩社會の分析が見事で

あつても、過渡期の把握が弱いのは、生産力や富の諸關係を動的・歴史的に認識出来ないで、後述するアサビヤ(‘asabîyah)の様な實在するし、又説明に有用ではあるが、一つの概念として理解された傳統⁽¹²⁾ですべてを説明したからである。

アラビアの遊牧生活者は、集團の畜群がふえるにつれて定住地域へ季節的な移動を始める。即ち、冬期をアラビアの高地で越して、春になると牧草や水を求めてシリアやパレスチナへ北上する。定住民とは相方の shaykhs の間で“khouwa”(兄弟の契)を結んで生活權を保證しあう。こうした遊牧民の定住地との關係が進むと、「一部づつノマドの集團から離れ、軍務、農耕、商品の輸送などにたずさわるに至る。⁽¹³⁾」

ナバテア人がヘレニスティク時代に占據したネゲブやトランスヨルダンの地は、この時代ばかりでなく、石器時代からこういう可能性を孕んだ様々な民族が目ざした。最近のネゲブ地方の調査によると、この地の定住集落は近東の他の地域の社會變化の波に合せて、(1) Late Chalcolithic (西暦前第四〇〇〇年紀末—) (2) Middle Bronze I (同一一—一九世紀) (3) Iron II (同一〇

—六世紀) (3) Nabataean (同二世紀—紀元後二世紀) (4) Byzantine の四期に榮えた。⁽¹⁴⁾そして、それぞれ集落が作られ、ナバテア人(Str., XVI, 4, 26; “dia lithou”)と同様に、石造の家に定住して、農耕・遊牧・貿易に従事した。⁽¹⁵⁾各時代に人々は放牧をしながらこの地に集り、前の時代までに進歩させられてあつた農耕技術を新しい社會の段階に適する形で前進させた。これはトランスヨルダンでも同じで、ナバテア人は兩地の先住者の持つていたこれ等の物質文化を繼承し、發展させた。⁽¹⁷⁾しかし、N. Glueck の認めるように、ネゲブが「古代近東地方の“key part”だつた⁽¹⁸⁾」のはここがエジプト・アラビア・パレスチナ・メソポタミアを結ぶ隊商路の結合點⁽¹⁹⁾だつたからで、それ故、この地が發展の頂點となつた。ナバテア人も、Glueck の考えるような農耕技術の天才としてではなくて、商品の交換に従事する人々(“emporoi”)としてその社會の要求に従つてここに現われた。交易の必要がナバテア人の遊牧社會を南パレスチナに定着させたことはデュソーも認める。⁽²⁰⁾こうしたより高度の經濟への要求を持つて定着した社會が、こうした風土に働きかけて初めて農耕技術の進歩が起る。

マルクスとエンゲルスも、ハルドゥンと似て、「有史以來、すべての東方諸種族において、その一部分の定住と他の諸部分の遊牧の繼續との間には一般的關係が立證される」と規定したが、ハルドゥンと違つて隊商貿易の重要性を認めた。⁽²²⁾

エンゲルスによれば、血縁共同體的な氏族制社會から古代國家への移行は次の通りである。未開社會から出た父系氏族制の強い牧人社會が最初の社會的分業、交換經濟・貿易を發展させる。その間に、農耕・家内手工業の生産力が高まり、勞働力として奴隸が求められる。この傾向が進むと、自由民の間にも貧富の差別が生じ、原始共產制が破壊され、各種族の同盟、敵對が起り、民族の軍司令官として王が現われる。次には、戰爭とそのため組織とが民族の生活の常設機能となり、隣接者の掠奪壓迫のための組織が社會の主要部分となる。⁽²³⁾以上の理論を足場として(ナバテア人社會の特殊點を考慮に入れた上で)、ナバテア人の王國成立の過程がその社會の發展に即して捕えられよう。しかし、ここで既に分るのは、ハルドゥンの云う健康な遊牧社會から、アサビヤを失わせる利益と私欲の結びついた都會への移行とは、血縁共

同體的共產社會の崩壞から最初の搾取のある社會(古代國家)への移行に他ならない、ということである。それ故、次にはこの移行の實態を示す史料の年代を検討しよう。

註 以下に於いて使われる省略は次の通り。

Dussaud = René Dussaud, *La pénétration des Arabes en Syrie avant l' Islam*, Paris, 1955

I Rostovtzeff = M. I. Rostovtzeff, *Caravan Cities*, tr. by T. and D. Talbot Rice, Oxford, 1932

II Rostovtzeff = Ibid., *The Social and Economic History of the Hellenistic World*, 3 vols., Oxford, 1953

BASOR = Bulletin of the American Schools of Oriental Research.

Rosenthal = Ibn Khaldun, *The Muqaddimah*, tr. by F. Rosenthal, vol. I, 1958

(1) Dussaud, p. 29 (2) Ibid., p. 14 (3) Rosenthal, pp. 250f: cf., p. 249 (4) Dussaud, p. 14 (5) Rosenthal, p. 250, n. 6 (6) Dussaud, p. 14 (7) Rosenthal, p. lxxvii (8) ストラボによれば、イドウメア人も昔ナバテア人だったが離反してユダヤに行き、その風習になじんだ(XVI, 3, 34)。ユダヤ人は當時沃地の民と思われていた(Stewart Perowne, *The Life and Times of Herod the Great*,

N. Y., 1957, pp. 95 f.) (6) Rosenthal, p. 249; cf., pp. 252 f. (9) Ibid., pp. 250 f. 又「肥えた土壌やよい牧草地を求めて競う一般的人性」も挙げられる (Ibid., p. 226)。(11) Ibid., pp. 250 f. (12) ハルドゥンはイスラム法學の概念としてのアサビヤにモンテを得た。cf., ibid., p. lxxix (31) Dussaud, p. 17. レヴァント地方についていえば、ローマ時代の碑文の個有名詞は、沙漠周邊の民が新しい定住民であつたことを示す (Dussaud, p. 18)。(14) BASOR, 152 (1958), p. 19. これ等より更に古く新石器時代にやえ農耕が行われたらしい (ibid., p. 30)。このことは Jericho の新石器時代についても分つてゐる (定金右源二、古代東方史の再建、新樹社、昭三〇、八〇四頁)。(15) Iron II の定住民の家については BASOR, 145, (1957), pp. 20 f. MB. I のものについては ibid., p. 20; 149 (1958), p. 15 (9) BASOR, 145, p. 20 (MB. I); ibid., 149, p. 10 (Iron II) (17) BASOR, 152, pp. 23, 32 (9) BASOR, 145, p. 23 (9) BASOR, 145, pp. 23, 19; 149, p. 10; 152, p. 36. 但し、N. Glueck は農耕技術を重んじすぎて、それを社會構造の中で正當に位置づけていないのは後述の通りである。(20) Dussaud, p. 29 (21) マルクス・エンゲルス書簡集、岩波文庫、昭二七、三、七二頁 (一八五三年六月二日、マルクス) (22) 同上、七九頁以下 (同月六日、エンゲルス) (23) エンゲルス、家族・私有財産及び國家の起源、岩波文庫、昭和二二、二二二

ナバテア王國の成立について

二二七頁。

二 史料について

ヘレニスティク時代のナバテア人について重要な史料は、Diodorus Siculus, Josephus, Strabo 及び考古學的發掘のレポートである。

ディオドルス (Augustus 時代の人) のナバテア人及びその關係事項についての記事は、“Bibliotheca” の (a) II, 48, 1—9 (9) III, 42, 1—43, 5 (10) XIX, 94, 1—100, 1 の三ヶ所に見られる。このうち、(10) はディアドコイ時代に將軍達の友として各地を轉戦した Hieronymus の「ディアドコイ史」に依る。

西暦前三一二年、Antigonus はエジプトに向つて軍を進めたが、入口にゐるナバテア人が障害になると考へて、息子 Demetrius (cf. Plut., Dem., 7) と將軍 Athenaeus を隊長とする討伐軍を送るが、その後で Demetrius は死海の近くに asphalt の産地を見つけ (Diod., XIX, 98, 1—99, 3)、その資源確保のために一隊を派遣する。その隊長としてこの Hieronymus (XIX, 100, 1: “Hieronymon ton tas historias syngrapsanta”) が現われ、又このあたりの記事は直

接の關係者でなくては書けない程詳しいので、この部分 (c) は西暦前三一二年當時のナバテア人を示すと結論出来る。次に、(a) は地誌的記述の一部で、そのうち asphalt に関する部分 (7—9) は上記 (c) の同じ部分と全く重複し、又ペトラが單なる岩山として描かれ、入口が一つあると記されていること (II, 48, 6: “mian anabasin echousa”, XIX, 97, 1: “mias anabaseōs”), 沙漠の井戸について一致していること等から、(a) と (c) は同じ Hieronymus から出たと見られる。一方そうとすれば、Hieronymus が同じ章の中に二度もペトラの入口について「唯一つの」(mia) と云う言葉を使うかどうか、又 (a) の中で過去のこととしてマケドニア人 (Antigonus) の來襲を記している (5)、(c) と (a) では asphalt の記事とその前の記事とのつながり方が同じでない、等々の疑問が出る。しかし、(a) のペトラの状況が (c) のと非常に似ていることは確かだから、この唯一の解決法は (a) の次、II, 49 以下の確實な史料である Posidonius の「アラビア誌」の中で、このストア哲學者が Hieronymus を地誌風に書き變えて用いていたものを、ディオドルスがそのまま

借りた、とすることである。(a) はシナイ地方誌の一部であつて、史料は Agatharchides (西暦前二世紀) の「紅海誌」である。この學者はアレクサンドリアに住んだので、この方面については信頼出来る情報の提供者である。

ヨセフスの「ユダヤ古代史」及び「ユダヤ戰役史」のナバテア人はマカベウスの亂以後のもので、この二書には重複が多い。ヨセフスの史料は「舊約マカバイ書」、ストラボの失われた史書 (西暦前一四六年で終る Polybius の史書の繼續) 及び Nicolaus of Damascus (クロデの同時代人) であり、ナバテア人は西暦前二世紀後のユダヤ史に關係を持つ部分でだけ現われる。「ユダヤ古代史」を中心にして、關係記事を年代順に記せば、(a) XII, 8, 335—336 (= I Macc., v, 24), XIII, 1, 10—11 (= I Macc., ix, 32) = 161 B. C. (a) XII, 5, 174— (= I Macc., xii, 31 f. 但し、¹⁾ Zabadadeans とある) = c. 140 B. C. (c) XIII, 13, 360 = c. 102 B. C. (d) XIII, 15, 387—392 (cf., B. J., i, 99) = 86/85 B. C. (e) XIV, 2, 19 (B. J., i, 126); 31—33; 46—48; 5, 80 f = 65—62 B. C. 等である。

ストラボ “Geographica” のアラビア誌は第一六巻第四章である。その史料は、(a) XVI, 4, 1—4 は Eratosthenes (275—195 B. C.) の地理書、(g) XVI, 4, 5—19 は Artemidorus (fl. 100 B. C.) だが、後者は更に前出 Agatharchides の「紅海誌」を種本とする。(c) XVI, 4, 20—は Eratosthenes, Ctesias, Agatharchides, Posidonius 等の名前を擧げるが、もとストラボと同時代に近いナバテア人を記録している。ローマの將軍 Aelius Gallus は Augustus の命令を受け、ナバテア人 Syllaenus を同伴してアラビアに遠征した (25—24 B. C.)⁽²⁾。Aelius は失敗してアレクサンドリアに歸つたが、そこでストラボと會つて (II, 5, 12) ナバテア人についても最新の情報を傳えた。「この遠征はこの國 (i. e. アラビア・フェリクス) についての知識を廣げることには殆んど貢獻しなかつた」(XVI, 4, 24) が、ナバテア王國については「多くの特色を我々に知らせた」(XVI, 4, 22) 次に、ペトラ生れのストア派の哲學者 Athenodorus が當時ペトラについてストラボに知識を與えた。「哲學者の Athenodorus は私の仲間 (hetairos) で、ペトラにいたことがあり、(そこ

ナバテア王國の成立について

で)ローマ人ばかりか多くの外國人が生活しているのを見た、と驚歎して物語つたものである。」(XVI, 4, 21) それ故 (c) はストラボの同時代のナバテア人を反映することは確かである。

以上の史料を表にすれば次のようになる。

	B. C.	A. D.
Diod.	(c) (a)	(b)
Str.	(a)	(b) (c)
Joseph.	(a) ↑ ↓ (e)	

註

(1) cf., S. Perowne, op. cit., p. 83.

(2) cf., ibid., pp. 113f

三 西曆前三一二年のナバテア人社會

西曆前三一二年のナバテア人の社會の第一の特色はそれが全くの沙漠生活 (“badāwah”) を營む點である。ナバテア人の生業の一つは、近隣のアラビア部族たち (Diod., 94, 4) と同様、沙漠を放牧地として使うラク

ダと羊の飼育であつた。それ故、討伐軍を送つた Anti-gonus の目的は、それ等の家畜を全滅させることだつた (XIX, 94, 1; cf., 9)。農耕は全く行われぬ——禁じられていたからである。「ナバテア人は自由 (eleutheria) を保守する。そのために、外敵が水を得ることの出来る河も豊かな泉水もない畠野を祖國 (patris) と稱して、戸外に住んでゐる。⁽¹⁾種を播かず、果實のなる (karpophoros) 木を植えず、酒を飲まず、家を建てないことがこの人々の掟である。もし誰かこれに反するならば、その者は死刑に値する。⁽²⁾」(XIX, 94, 2—3)「何故なら、このようなものを持つ者はそれを利用したせるために、たやすく權力者の命令に従わざるを得なくなる、と信じてゐるからである。」(ibid., 4) 即ち、ナバテア人の「自由」と定住文明は對立する。エンゲルスが「氏族制度は支配と隷屬とを容れる余地を持たない⁽³⁾」と考えた通り、こういう掟が血縁共同體の自己保存を可能にするものとして、ナバテア人の傳統 (traditio) となつてゐた。⁽⁴⁾ハルドゥンの社會學では、それはアサビヤと呼ばれる。⁽⁴⁾これは group feeling (Rosenthal), esprit de corps, spirito di corpo o di parte, nationalism, social solidarity,⁽⁵⁾

團結心、部族精神、部族魂⁽⁶⁾などと譯されるが、血縁共同體内部の現實的倫理的諸關係が慣習化したもので、それが掟としてその共同體に屬する各人に働きかける。ハルドゥンによれば、本當のアサビヤは「血縁による結合或はそれに相當する何かからだけ生じ得る。⁽⁷⁾」沙漠の中でラクダと共に生活するアラビア人は苦しい環境の中で社會を維持しなくてはならないので、お互いの結びつきが最も強く保たれる。⁽⁸⁾それ故、アラビア人は一番アサビヤが強く、血のつながりを重んずるので排他的である。⁽⁹⁾又それ故、アサビヤは社會の次の段階への發展に際しては保守的イデオロギーとして働くであろう。

共同體の日常生活ではアサビヤは、集團内の秩序を長老 (shaykhs; Diod., XIX, 97, 6: presbytetoí) の下にきちんとさせ、⁽¹⁰⁾外敵に對しては部族の戦闘員に確固とした態度をとらせる。このように、アサビヤは靜的な排他性の原理であるだけではなく、社會維持のために人々を活動させる眞の傳統である。ナバテア人は沙漠中に外敵から身を守るための貯水池を掘つたり、⁽¹¹⁾外敵に備えて畜群への水の與え方を工夫する (XIX, 94, 9) し、Antigonus の侵略の時の記録から想像されるように、

防備の體制を油斷なく固めていた⁽¹²⁾ (XIX, 97, 1—2) 復讐も素早い (XIX, 95, 4)。

こういうナバテア人の生活をナバテア人自身から聞くことが出来る。マケドニア軍と戦ったナバテア人は翌日軍使を送り、次のように口上した (XIX, 97)。

「(3) デーメートリオス王よ、王は何がほしくて、又何の必要あつて我々と戦うのか。我々は沙漠に寢起していて、そこには水も穀物も酒もなく、一言でいえば汝等のもとで使うに適するものなど何も持つていない。(4) 何故なら、我々は絶対に隸屬するつもりがないので、他の人々の間では有用とされているあらゆるものを缺く土地に逃げ込み、汝等に何の害も與えず、すつかりけだもの風に沙漠で暮す生活 (*bios erēmos kai theriōdēs*) を選んだ。それだから、汝と汝の父 (*i. e. Antigonus*) に、我々に對して不正をなさないように、そして我々から贈物を受けとつてから、軍隊を徹退させ、これ以後(我々) ナバテア人を「友人」と呼んでくれるようにお願いする。(5) と云うのは、欲するなら當地に何日踏みとどまつてもよいが、水や他のあらゆる必需品をどうするかも分らない上、(今のとは) 別の生活をするように

我々を強制することも出来ない。でなければ、他の風習の中で生き延びる氣のない、元氣の失せた奴隷共を手に入れることであろう。」ここで語られる “*bios erēmos kai theriōdēs*” がナバテア人の遊民としての生活を盡している。

しかし、このようにアサビヤで保守された社會は、多かれ少かれ他の遊牧民と共通のもので、何故ナバテア人がその水準から脱して古代國家を建設出来たかは分らない。そこで問題となるのが、同じディオドルスに記されたナバテア人の隊商貿易である。

ヘレニスティク世界の經濟の基本的流れは東方財貨の西方への壓倒的な進出であるが、その實際のにない手は隊商貿易の従事者と品物を西方にさばく大小の商人だつた。そして、隊商の活動なしにはヘレニスティク時代のパレスチナの一切の發展は考えられない。例えば、ロストフチェフは後年ナバテア領となる「トランスヨルダンの町々の發展は貿易だけによつて説明されるべきである⁽¹⁴⁾」と主張した。しかし、ロストフチェフの場合、*Hellenization* と云う觀點が勝つて、ギリシャ人の王朝が支配するための手段として都市化を推進したと云う考

(15) えと、貿易の重要性の増大による諸東方都市の興隆と云う考えとが混亂しているように見える。都市化(“urbanization”)によるギリシア人の東方支配と云われるものは、決して“polis”を生み出さなかつたし、むしろ東方世界が古來發展させたと同じような都市社會が新しい經濟的條件の下に新しい發展をしたのではなかつたろうか。幾つかの都市の上層階級の間では“gymnasium”の設置など見せかけの植民地的な“zōon politicon”が營まれはしたが、アレクサンドロス等が人爲的に建設した都市のうち間もなく消え失せたものが多いのは、東方世界独自の史的發展法則の方が優越したことの證據である。それ故、隊商貿易の問題もそれによつて都市を築くに至つた部族の社會的發展と云う側から考えなくてはならない。

アラビアの北部からシリア沙漠に至る地域は太古から、古代東方文明の諸中心地を結ぶ隊商活動の舞臺だつた。最近の發掘はネゲブ地方のうち、Abdehの近邊がMiddle Bronze Iの時代以來最も強度な定住集落の生じた場所⁽¹⁶⁾で、それは交通の要衝に當ると云う地理上の位置のためであつたことを指摘している。このような東方

隊商世界が形成されたのは、スメロ・アツカド時代からで、神政の經濟がその活動を含んだ。「商業に於いて、古代スメロ・アツカド人は東方及び西洋諸國民の最初の教師だつた」⁽¹⁷⁾商人とか隊商と云う言葉は勿論、隊商組織自體も東方の傳統に従つて形成されたもので、ロストフチェフによれば、隊商の掟はパルチア時代に於いてもギリシア化したバビロン法であつた⁽¹⁹⁾。例えば、パラミラの隊商組織を見ると、各隊商毎に“archemporoi”或は、“synodiarchai”⁽¹⁸⁾なギリシア語の名前の役目が知られるが、こう云う制度はバビロン系のものである⁽²⁰⁾。マルコ・ポーロによると、ペルシアに入つたタルタル人達は原住民の隊商に對する掠奪行爲を厳しく罰し、ルート⁽²¹⁾の保全を心がけ、原住民は自分達の土地を通過する隊商に案内人をつけ安全を保證する義務を負つた。オリエントでは古來こうした安全保證が工夫された。後年、ナバテア人もパルミラ人も自分たちのルートに沿つて守備隊を持つた⁽²²⁾。ネゲブ地方のナバテア時代の前の城砦遺跡は隊商路の保護をも目的としたであらう⁽²³⁾。

しかし、ナバテア人は初めから上記のような組織的な隊商として現われるのではない。西曆前三一二年には、

部族がようやく商品の交換の仕事から多くの利益をあげ始めた段階である。「ナバテア人は人口一萬人程であつても、他の（遊牧民の）部族を富に於いてはるかに凌ぐ。と云うのは、その少からぬ者が常に海の方へ香料や没薬や薬味の類でも最も高價なものを運ぶ仕事になれてゐるからで、それ等の品をナバテア人はアラビア・フェリックスと云われる地方から運んで来る人々から獲得する。」(Diod., XIX, 94, 4—5) 即ち、ギリシャ人の觀察によつても、貿易がナバテア人の社會を他のアラビア遊牧民のそれと違わせていたことが理解されていた。そこで、當時のナバテア人の富は具體的にどれ程だつたか。

Athenaeus によつて掠奪され (Diod., XIX, 94, 3)、再び取り返された (ibid., 96, 1) 物品は、乳香・没薬の大部分と銀五百タラントン⁽²⁵⁾であつた。しかし、この時ナバテア人の壯丁は殆んど近くの市場（後述「國民祭」）⁽²⁶⁾に行つていた (ibid., 95, 2f.) から、實際の富はこの何倍かであつたろう。アレクサンドロスがガザで掠奪した香木と没薬は合計六百タラントンで、それは故郷への贈物とされた程價値が高かつた (Plut., Alex., 25) し、重さも三〇トンと見積れるので、たとえそれがガザの

町のストックであつたにしても、行われていた商業活動の盛大さは確かである。だから、ナバテア人が貿易からあげる利益は多額で、その人口數や生活の單純さから考へて富の蓄積も急上昇していたにちがいない。當時のナバテア人の家畜の數は、Demetrius の襲撃に備えたナバテア人の行動から、急場の處置が可能な程度だつたよう (cf., Diod., XIX, 97, 1) だが、Agatharchides (西曆前三世紀) によると (apud Diod., III, 43, 4) 信じられない程の數になつていたと云う⁽²⁸⁾。これは貿易の利潤が牧畜に投下されたためであろう。

以上の富は動産で、家とか農耕とか不動産に關する富の所有は前述のようにナバテア人の掟が禁じた。そして、こういうものの所有は、原始共產制の破壊となり、ナバテア人を王國の建設、掟の揚棄へと導く。古い上部構造として掟はそれを抑壓する。

しかし、當時はペトラはまだ、ストラボに見られるような首都 (XVI, 4, 20; "métropolis tôn Nabataion") でなく、岩山の城砦で、非常の場合に動産と老人女子を隠す場所として用いられた⁽²⁹⁾。即ち、ナバテア人はふだんは香料や銀を持つたまま遊牧してゐて、長期の不在又

は非常の時以外は、財産 (Diod., XIX 95, 2: "tas ktēseis"; ibid., 97, 1: "tas aposkeuas" —これには家畜は含まないと解される。) をペトラに置かない。それ故、ペトラには隊商都市の中心部である市場や隊商宿は勿論存在しない。ナバテア人の商業は別のところで行われた。「近隣に住む人々 (部族) がそこに來て、或る者達は荷をほどこき、或る者達は必要品を買うならわしの國民祭 ("panēgyris") の時が近づく」と、この集りのために旅に出る。」 (Diod., XIX, 95.1) ここに出て來る國民祭は本來、ヘロドトスのエジプト誌にあるような (II, 58f.)、特定の民族神のために催される祭典で、そこに集る大群集 (例えば、エジプトのブバステイスのアルテミス祭には七〇萬人も集った。cf., Hdt., II, 60) が物資の交換の場を作り、緣日の市としてその地方の經濟活動の中心になる。ナバテア人の行つた國民祭もアラビア諸部族のこういう祭禮であつたらう。デュソーは遊牧民が定住民より賑やかな祭禮に引かれがちであるのは、そこに市が立つからで、定住する時もそんな機能を眞似るものであると指摘した。⁽³⁰⁾では、その國民祭の行われたナバテア人の市場は具體的にどこであつたかについて

て斷定は出來ない。當時、ナバテア人の土地に來る隊商路の要衝はペトラの東にある Ma'an で、ナバテア人の商人はここでもオリエントの品物を求めたが國民祭⁽³¹⁾が行われたかどうか分らない。

この點で注目する必要があるのは、ナバテア人のアカバ灣、シナイ半島方面との關係で、後述するように遅くとも西曆前二世紀頃迄にはナバテア人の澤山の集落がアカバ灣の付近に出來たから、その前から交易の上で相當な關係があつたことが想像され、Agatharchides のシナイ誌にある國民祭はナバテア人を含めて近隣の人々 ("perioikoi") が取引をした場所ではなかつたらうか。そこは棕櫚の森の中の聖域⁽³²⁾で (Diod., III, 42, 4 = Str., XVI, 4, 18) ラクダが多數生贄にされた (Diod., III, 43, 1) が、ラクダの奉納はナバテア人等遊牧民の儀禮である⁽³⁴⁾。とはいへ、この國民祭は五年毎 (penteterikēs) にしか催されなかつたので、ナバテア人たちはふだんは Ma'an 等のルート⁽³⁵⁾の要衝で取引し、他の神々の祭の時もその緣日を利用したのである。最後に、西曆前三一二年のナバテア人の社會で考えるべきことは、何故ナバテア人が沙漠の中に逃げ込み、そ

ういう場合のための祕密の用水 (Diod., XIX, 94, 6—9: II, 48, 2) を使って、マケドニア軍と戦わなかったのか、何故ペトラに守備隊を置いてそこを中心に関わざるを得なかつたのか、という疑問である。その答は既に明らかのように、ナバテア人が生活に必要である以上の財を蓄積していたので、その富がペトラという城砦とその守り手を要求したということである。そして、この最初の物神がナバテア人にすべてを棄て去ることを禁じ、沙漠的生活のアポロジ⁽³⁶⁾であつた Demetrius への口上を結果の上からはペトラの中に隠された富の防衛へと轉化させた。マケドニア軍に多くの贈物や人質まで與えて撤退を願つた (Diod., XIX, 97, 6; *ibid.*, 98, 6; Plut., Dem., 7) のも、デュソーの指摘するように、「自分たちの利の多い隊商貿易をとぎらせなくなつた」⁽³⁷⁾からに他ならない。こうして増大して行く貿易活動は、アラビア語族であつたナバテア人に、當時すでにシリア文字を使わせた (XIX, 96, 1: “Syriois grammasi”)。これはナバテア人がアラム語世界の商業生活に深入した證據である。

以上のような發展は遊牧という古い生業がより多くの

ナバテア王國の成立について

富をもたらす貿易という生業に従屬させられる過程であり、分業が貿易にたずさわる者を富ませ、沙漠の血縁共同体は定住された古代國家へと進み始める。

註

- (1) cf., XIX, 96, 2: “nomada bion”—nomas(=roaming)=*noikētos*.
- (2) 舊約エレミヤ記のレカブ人と同じ風習である (XXXV, 6—10)。
- (3) エンゲルス (上掲書—以下同)、二〇九頁。古代的自由の本質はすべてこのようなもので、そのために古代では自由が保守的貴族制と結びつけて主張された。
- (4) cf., Rosenthal, pp. lxxviii ff.
- (5) C. Issawi, *An Arab Philosophy of History*, John Murray, 1958 p. x
- (6) 齋藤信治、沙漠の人間、櫻井書店、昭二四、一四三頁。
- (7) Rosenthal, p. 264
- (8) cf., *ibid.*, p. 265. なぜなら、一緒に住むとか、協力とか、長期の交友、幼なじみ、同一の育て親を持つ、その他の生死を分かちあふ事柄が集團の結合力を生む。ハルドウンのこの考え方にはアリストテレスの影響が濃い (cf., *Eth. Nic.*, IX, 7)。
- (9) エンゲルスは血縁共同体の性質として「同一地域に結合

して定住(即ち生活)し、そこに排他的に居住する(即ち生きる)』(二二頁)。

- (10) Rosenthal, pp. 262f. こういう抑制力は君主の權力(mulk)とは別のものである(ibid., p. 284)。
- (11) ディオドルスによると、いつくかで固めた水路を持った幾つかの地下貯水槽で、雨水で満した後、ふたをして自分たちにだけ分る印をつけておく(XIX, 98, 6—8)。
- (12) Antigonus は欺きによつてバビリア人を討つてしたが、その試みも見破られた(XIX, 96, 2—3)。
- (13) ハルドウンは沙漠生活が要求するものは“necessities”, 都會生活が要求するものは“conveniences”と“luxuries”という風に分類した(Rosenthal, p. 249)が、この場合の“tôn par'hymîn eis tēn chreian anēkontōn”が後者に該当する。
- (14) I Rostovtzeff, p. 63; cf., p. 65.
- (15) cf., ibid., pp. 58f.
- (16) BASOR, 145(1957), pp. 17ff.
- (17) B. Hrozný, Ancient History of Western Asia, India and Creta, tr. by J. Procházka, Prague, n. d., p. 83.
- (18) Hrozný は tamgaru (=merchant, Assyro-Babylonian) が taggarā (Aramaean, Syrian), tadjir (modern Arab), torg (Russian), trh (Czech), turgus (Lithuanian) 等と harrân (=caravan, Sumero-Akkad.) が harvana (Hittite), kârvân (Persian) 等になった。
- (19) M. Rostovtzeff, The Social and Economic History of the Roman Empire, Oxford, 1953, p. 614, n. 34.
- (20) Ibid., p. 171; I Rostovtzeff, pp. 142ff.
- (21) Marco Polo (Everyman's), 1958, p. 53f.
- (22) I Rostovtzeff, p. 113. ローマの屬州となつてからのものについては村川堅太郎譯「エリヤトラ海案内記」参照。
- (23) cf., BASOR, 152, p. 36.
- (24) 多分ガザなど地中海岸の町。
- (25) 古代のアナトリアやエジプトと同様、銀は取引の際の貨幣の役をしたであろう。
- (26) 一七九頁。
- (27) アイギナ・トラシアンとして約三〇トン。cf., S. Perowne, op. cit., p. 20.
- (28) 後出一四八頁参照。
- (29) 「ペトラは非常に強固な場所である。唯一つの入口坂道によつて一時に小人數ずつ昇つて入る。こうして自分の財産の貯えを安全に保つ。」(Diod., II, 48, 6)
- (30) Dussaud, p. 37.

- (31) Ibid., pp. 24ff., esp., p. 26.
- (32) cf., I Rostovtzeff, pp. 27, 65.
- (33) ここにプトレマイオス(二世^(a))の臣下 Ariston が Poseidon Pelagios に神殿を奉納したのは、海上貿易の利権確保のためだったろう。
- (34) 後年、イタリアの港 Pozzuoli ではナバテア人の神 Dusares に二頭のラクダの黄金像が奉納された (F. Cumont, *The Oriental Religions in Roman Paganism*, N. Y., 1956, p. 111)。
- (35) 國民祭があつたか否か分らないが、アカバ灣付近には他にも「すべてのアラビア人から」崇められた神殿があつた (Diod., III, 44,1)。
- (36) Dussaud, p. 23.
- (37) 異説もあるが、この點に關して、ibid., pp. 21f.
- 四 ナバテア王國の成立
- ロストフチエフは「西曆前四世紀にはナバテア王國(kingdom)が確立された⁽¹⁾」と考えたが、以上に記した通りそれはまだ古代國家へ向う矛盾を含んだ社會で、王國成立は以下に述べる通り同二世紀とするのが正しい⁽²⁾。
- その間にある西曆前三世紀のレヴァント地方は三次のシリア戦争を中心⁽³⁾に展開するが、繼承者諸王朝間の成立とローマ世界の西方での興隆が隊商貿易に對する需要を

ナバテア王國の成立について

増大させ、多くの東方都市の内的發展を促進した。ナバテア人の富の蓄積も急激に増し、社會の矛盾が部族にその解決を要求する。

ナバテア人はどのようにしてネゲブやトランスヨルダンの農耕集落に入り込み、西曆前一世紀にダマスクスにまで達したのだろうか。マケドニア軍はナバテア人に出會うまで不毛の土地を定住地 (“oikouménē”) から三日間行軍した (Diod., XIX, 97, 1; cf., ibid., 95, 2)。

又、マカベイ戦争の時にもユダヤ軍はヨルダン河から三日間程の所でナバテア人に出會つた (Joseph., XII, 8, 335)。しかし、この間にナバテア人の社會の富の蓄積は上昇し、定住地へ向う傾向は強まっていたから、最近の調査の示すように定住の傳統を持つたネゲブ等の村落居住民との結びつきが進んでいた筈であり、初めは前述の “khouwa” と隙を見ての掠奪、次には隊商路確保のための占據、それによる利潤の投下、農耕技術の改良へと向つたであろう。こうして人々からは、ナバテア人の土地は「ユダヤに境を接する」 (Joseph., XIV, 1, 15) と思われようになつて、農耕でも沙漠周邊の零細農耕者として「肥沃な新月形地帯」に接續するに至る。

どの古代民にとつても、生活の糧の獲得は合理的な手段で行われたものではなかつたように、ノマド社會の定住地への反應形式も“*khawwa*”だけではなく、“*ghazwa*”も行われた。「部落や隊商を急襲して風のよりに沙漠に歸つて行く」この“*ghazwa*”（掠奪）は「遊牧の民の重要な生業⁽⁹⁾」である。「ナバテア人は掠奪の生活（“*bios Iestrikos*”）を送つていて、隣接の土地の多くを踏みにじり掠奪を働くが、戦斗によつて打ち負かすことは困難である。」（Diod. II, 48, 2）何故なら、沙漠で暮して、その貯水池（前出）を敵に悟らせないからである。即ち、既に述べられた“*bios erēmos*”というアサビアの生活が據點となつて掠奪が行われた。沙漠の民に動的な排他性を保たせるアサビヤは掠奪や戦争によつて強化される。「戦争をしばしば行うことは社會的紐帶を強固にさせるのに役立つ、又掠奪を行うことも、人間に相互の愛着と勇氣を鍛える機會を與える。人間精神のあらゆる良き素質を無くし脅さんとしたもの、人間社會から正義を無くするかに思われたものが、實は人類を氏族や諸團體に結合せしめるに役立つ。」⁽⁷⁾「それ故、“*ghazwa*”は遊牧民のアサビヤに於ける倫理的機能で

ある。しかし、遊牧民の貿易が商人の貿易に變り富の蓄積と定住への傾向が増大するにつれ、掠奪の機能が侵略のためのものに變質する。そして、「古い氏族の秩序は富の暴力的掠奪を正當化するために濫用された。」（エンゲルス）生活のための血縁的結合力が富の收奪のためのものに轉化する。そのような社會では富が力を與えてくれ、生活がではなくて富が掠奪を要求する。Agatharchides はナバテア人による海賊行爲を伝えるが、舟による掠奪は既に遊牧民の“*ghazwa*”ではない。こうして今こそ本當に正義が失われる。

「最も秀でた商人 Philadelphus」（ロストフチェフ）は東方貿易に紅海を使い始めた。⁽⁸⁾「昔正義に適つて（“*dikaíosynē chrōmenoi*”）生活してゐて、家畜からとれる食物で満足してゐたナバテア人は、後になつてアレクサンドリアの王達が商人のために海路を開發した時、難船した人々を掠奪し、次には輕舟（*skaphis*）を作つて船客を襲つた。これは黒海のタウロイ人達の兇惡で無法な生活（cf. Hdt. IV, 103:「掠奪と攻伐によつて生計を營む」）を眞似たのである。しかし、そのうちに大型船（“*tetrērīkōn skaphōn*”）によつて海上で捕

えられ正當に懲しめられた。」(Diod., III, 43, 5; cf., Str., XVI, 4, 18) これはアカバ灣の出來事で、ストラボにはそこでナバテア人が島々に住むとさえ記されている。

ロストフチェフはこういう「ナバテア王國」について、「或る學者達が考えているような泥棒・海賊の社會ではなく、組織的な商業國として現われ、隣接の強國によつて脅された自由に對して強力な防衛を行うための、よく考慮され注意深く定められた方策を持つていた。」⁽¹⁰⁾と考えたが、この見解の對立は Hieronymus 及び Agatharchides が傳える初期ヘレニスティク時代のナバテア人についての報告のうち、隊商貿易と掠奪行爲のうちどちらか一方だけを採用するから起る。實はこれ等の報告の中に見える矛盾と思われる事項は、ナバテア人のこの段階での社會的矛盾そのものを現わしているのだから、報告は矛盾や誤を含んでいず、この時代のナバテア人の社會が一面的に規定されること自體に疑問がある。こう云う矛盾は勞働力・生産力の急上昇によつて示される。西曆前三二一年には一萬人にすぎなかつた(Diod., XIX, 94, 4)が、Agatharchides によると、ナバテア

人のアカバ灣附近の集落(“pollai kōmai”)は海岸線と内陸にのびる土地の少からぬ部分を占め、人口は口舌に盡し難い(“anythētos”)程、家畜數も信じ難い(“apistos”)程であつた(Diod., II, 43, 4; Str., XVI, 4, 18: “polyandros”)。西曆前六五年に Aretas III がイエルサレムに攻め込んだ時の軍勢は騎兵歩兵それぞれ五萬だつた(Joseph., XVI, 2, 1)から、全ナバテア人は數十萬はいただらう⁽¹¹⁾(それより前、同八六年には一千騎が現われる。ibid., XIII, 15, 1)。

次に、ナバテア人が社會的に變質しながら前述の掟と矛盾する方向へ發展する際に、農耕がどう始められたかを考察しよう。

ストラボ時代のペトラのナバテア人は石造の家に住み、酒も飲み、その國は地味が豊かでオリーブ以外は何でもとれ、物資も國產が多かつた(Str., XVI, 4, 26)。即ち、日常生活がヘレニスティク時代の初期と逆のものに轉化している。

最近行われたネゲブ地方のブドウ塚⁽¹²⁾(teleilat el-a'nab)等に関する發掘は、ナバテア人の農耕生活について多くの點を解明した。

ブドウ塚はネゲブ周辺の多くの遺跡の近くにある石片まじりの土の堆積で、禿げ山の斜面に（或は涸河にも）列をなして點在する。⁽¹³⁾その最初の研究者 Palmer は附近のベドゥイン達の言葉通り、それはブドウ塚（即ちブドウ栽培用の土盛り）だと考えたが、その説には A. Musil, L. Woolley, Lawrence of Arabia, Wiegand, W. C. Lowdermilk, P. Mayerson 等が賛成し、補った。⁽¹⁴⁾つまり、塚の黒い石片が日光を吸収してブドウの木の子育を助けると同時に、土中の水分の蒸發を妨げる一方、塚の谷が垂れた房を土が汚すのを防ぐ、と云うのである。⁽¹⁵⁾それに對し Y. Kedar, Tadmor, M. Evenari, D. Keller, N. Glueck 等は塚自體は栽培用ではなく、斜面の下方の涸河で行われた耕作や給水のための水利施設であるとして、それぞれ（a）土壤侵蝕説（塚の出來た理由は山肌の石を塚型に集め、むき出しになつた土を雨水の侵蝕で涸河に流して耕地を作つたためである）（b）雨水流下促進説（雨水が山肌を下降するのを能率的にするためである）（c）雨水流下制御説（同じく雨水の流れを特定の場所に向けて調整するためである）と云う様な説を立てた。⁽¹⁶⁾Palmer 説をとる Mayerson はこ

れ等の説を批判する。「ネゲブ地方のナバテア人やビザンチン時代の人々を水利學や氣象學のデータをよく知つている場合に我々ならそうするであろうような、科學的、で能率的な農政家（agronomists）と考えるために曲解が起つたようである。むしろ、この人々は邊境の零細な耕作者と考えられるべきで、その工夫も他の沙漠周邊地帯で行われることと大して違わない。」⁽¹⁷⁾

N. Glueck もネゲブのナバテア時代を西曆前二世紀からとするが、ナバテア人がその少し前には農耕一切を死刑によつて禁じられた遊牧民であつたこと、貿易による富の獲得につれて沙漠中の零細な農耕集落の中へと進出したことを忘れてゐる。ナバテア人の當時の社會發展の段階と古い傳統（すでに生活そのものではなく、イデオロギー化したであらう）とを無視する近代的解釋が、⁽¹⁸⁾Glueck にナバテア人を農耕文明の天才のように考えさせた。のような農耕一元論は、ナバテア人社會の發展を天分に歸することになり、東洋社會の風土的停滯と云うような自然決定論の非科學性と大差ない。Glueck の考へてゐる通り、ナバテア人は給水の問題の解決者であつたろうが、⁽¹⁹⁾沙漠にいた時代のナバテア人も他の沙漠居住

者同様 (cf. Str., XVI, 4, 2)、相應の水利に工夫を凝らしていた。ナバテア人は定住地の古來の傳統を、自分達の社會の段階が必要とする生産力に應じて、繼受し發展させた。即ち、「地理的諸原因は社會的諸原因を媒介としてでなくては人間に働きかけない。」(ヴィダル・ラ・ブラーシュ)そして、その社會的要因の發展はこれまで述べた通りで、それはナバテア人の農政家としての天分ではなく、交易が富の獲得を狙う社會を作つたことである。従つて、ネゲブの農耕はペトラの最盛期よりはるかに遅れて、Mayerson の考え通り、西暦四—七世紀に最も盛んであつたとしてさしつかえない。

世襲の王家を持つていたナバテア人 (Str., XVI, 4, 20) の記録された最初の王 (basileus) は西暦前一六九年頃の Aretas である。又、ペトラの王宮がはつきり現われるのは Aretas III (87 [85]—62 [60] B. C.) の治世である⁽²¹⁾ (ibid., XIV, 1, 16: “ta basileia tou Areta”)。この王の時に初めて貨幣が打たれた。そして、貨幣制度はエンゲルスという通り、古代氏族制度と絶対に相容れない。これ等のことは、ペトラが岩山の集落から隊商路をメインストリートに持つ石材都市となり、王制を成立⁽²³⁾

させたのは西暦前二世紀中頃から同一世紀前半だつたと思わせる。この時代にナバテア人の社會は富の蓄積に於いて決定的な前進をし、それにふさわしい一つの新制度——國家が作られた。

この決定的な前進をひき出した外的要因として (1) パルチアとペトラの結びつき (2) ローマ世界の東方進出とその需要の二點が考えられる。

ナバテア人は西暦前三世紀末以來、レヴァントに前出したセレウコス朝とも結んだらしいが、⁽²⁴⁾ 北方の隊商路で勢力を持ち、やはり同朝と交易したゲラ人と競争しなくてはならなかつたので、新興パルチア人と早くから手を結んで、セレウコス朝没落後の北方の交易を手中にしようとした。⁽²⁶⁾ パルチア人とナバテア人の初期の交流はペトラの淺浮彫で知り得るし、西暦前四一年にはパルチア人が二度目のレヴァット侵入を行い、ナバテア王 Malchus を従わせた (Joseph., XIV, 14, 370)。西暦前一世紀前半のナバテア王は多數の騎兵を率いていた (前出一八四頁) が、馬はディオドルスにも現われず、アウグストゥス時代にもいなかった (Str., XVI, 4, 26: “hippōn aphores hē chōra”) ので、それは狩獵文化の色彩の濃

い、騎馬の上手なパルチア人の戦術の影響であろう。かつて沙漠で排他的に生きた民族が、外國の勢力と結んでパレスチナの紛争に参加する。そして、このヘレニステイク的紛争を行つた様々な故郷喪失者たちには、ローマ帝國の興隆によつてますます多くの財貨が流れ込む。一方、この地方にも及んで來た *Pax Romana* が遊牧人口の定住への動きを強めた⁽²⁸⁾。「ナバテア人はローマに従う前には、しばしばシリアの地方を荒した」(StrXVI, 4, 21) が、Antigonus 以來最強の軍隊によつて行われて西暦前六三年の Pompeius によるパレスチナ遠征の時、ナバテア王は「それまでローマ人の力を全く問題にしていなかったのに、この時は甚しく恐れて、あらゆる命令に従つてそれを果す決心だと手紙に書いた。」(Plut., Pomp., 41) ペトラに王宮を持つ王がかつてのように沙漠へ逃れて戦うことは敗戦である。ペトラの富がかつて自由を愛した (Diod., XIX, 94, 6: "philoleutheroi") 民族を隷屬へ導く。こうしてナバテア人はヘレニステイク世界の諸運動の表面に出て、部族の外へ富と支配を求めて出て行く。ローマ軍のアラビア遠征を案内したナバテア人 Syllaenus の本心がどこにあつたかについてスト

ラボは、「私が思うに、その目的はスパイとしてかの地の状態を調べ、ローマ人と共に都市や部族を亡ぼし、ローマ軍が飢えと疲労と病氣によつて、又彼が裏切るつもりで仕かけたあらゆる災によつて奔命に疲れてから、自分がすべての土地の主人であると宣言することであつた」(XVI, 4, 24) と書いた。

こうして、ナバテア人の隊商貿易が富と支配を嫌い、自由を愛する社會をその逆のものへ轉化させ、古代國家を成立させた。

“Est apud illos et opibus honos; eoque unus imperitat”. — Tacitus —

註

- (1) I Rostovtzeff, p. 55
- (2) Dussaud, p. 29
- (3) この戦争の本質は經濟戦争だつた (cf., I Rostovtzeff, p. 58; p. 30)。
- (4) 「シリアとエジプトの間には、多くの様々な部族が介在するが、その東側はナバテア人なるアラビア人が占め、一部は沙漠で、他は水も收獲も殆んど無い土地を分ちあう。」(Posidonius (?) apud Diod., II, 48, 1)
- (5) 一八五頁參照。

- (6) 前嶋信次、アラビア史、修道社、昭三三、一七頁。cf., Rosenthal, p.302.
- (7) ファーガスン、市民社會史、角川文庫、上、一三五頁。ハルドウンはファーガスンの先驅者と考えらる。cf., Rosenthal, p. lxvii, n. 86.
- (8) エジプトに輸出されたアラビア商品は没藥、乳香、肉桂、甘松香、香液、眞珠、珊瑚、金等 (cf., II Rostovtzeff, pp. 386f.)。海路の開発を考えたのはアラビア人が多額の間搾取をする隊商路を避けるためだった (I Rostovtzeff, p. 56)。プトレマイオス朝による紅海の據點 Berenice の設置の時期には異説があるが、Rostovtzeff の Tarn の Philadelphus 世とみる (cf., II Rostovtzeff, p.1414, n. 185)。
- (9) cf., Diod., XIX, 94, 9. 10—羊肉とミルクと野生密等。cf., Hdt., VII, 31; Exod., XIV, 31.
- (10) I Rostovtzeff, p. 55.
- (11) 考古學的にも、ネゲブの人口密度が最も大きくなったのは、ナバテア期以後とされる。cf., BASOR, 149, p. 10; 152, p. 36.
- (12) 中心は N. Glueck の調査隊とヘブル大學の學者達で、著した本として Glueck, Rivers in the Desert, 1959 がある。BASOR のジャーナル Nos. 131, 137, 138, 142, 145, 149, 152, (155).

ナバテア王國の成立について

- (13) Mayerson の分類によると、その型は三種ある—(a)圓堆形 (25—50 cm. h., 150—350cm (直径))、列間隔は 2.5m (b)畝形 (12—25cm. h., 250—300cm. w., 列間隔 6—10m (c)植木鉢形 (プリンの形—50cm. h., 250—300cm (低邊直径))、列間隔 15m) — BAROR, 153, pp. 21f.
- (14) Ibid., p. 24.
- (15) Avi-Yonah, Britain, Boyko, R. Calder等は石片は空中の濕氣を露に凝結させる働きをすると考えた。コールダー、沙漠と斗う人々、岩波新書、昭三四、二二二頁以下参照(「露塚」)。
- (16) (c)説をよむ N. Glueck の説明は、BASOR, 149, pp. 12f.; 152, p. 21; cf., 155, p. 5, n. 9. (d)説については、ibid., 149, pp. 12f.; 150, pp. 25f.
- (17) Ibid., 153, p. 19.
- (18) cf., ibid., 145, p. 17; 149, p. 12; 152, p. 32.
- (19) Ibid., 149, p. 14.
- (20) Ibid., 153, p. 31, n. 46. 西暦前六二年、Scaurus がナバテアに侵入した時、その軍隊は飢えて苦しむ、食料をエダヤから送つてもらつた (Joseph, XIV, 5, 80) ところが當時の農耕が貧弱だった證據である。
- (21) cf., Str., XVI, 4, 26—“en onkō megalō” や “en oikō megalō” といふ語は、エダヤの土地を指す。
- (22) II Rostovtzeff, p. 1536, n. 135.

- (23) ブラーシュ、人文地理學原理、岩波文庫、昭二八、下卷
一九頁、二六頁以下參照。
- (24) I Rostovtzeff, p. 62.
- (25) II Rostovtzeff, p. 1491, n. 124; cf., p. 458.
- (26) cf., Dussaud, p. 26.
- (27) ナバテアばかりでなく、アラビア全體にいなかった
つ (Str., XVI, 4, 2) 馬とラクダは兩立しない (Hdt.,
VII, 87)。ブラーシュはナバテア人がすぐれた速力を持
- (28) cf., Dussaud, p. 17.
- つ輪送用單峯ラクダを品種改良によつて作つたと考えた
(人文地理學原理、下卷一四一頁參照) が、既に *Meises*
のギリシア遠征軍のアラビア人は「速力が決して馬に劣ら
ないラクダ」 (Hdt., VII, 86) を使つていた。だから、ナ
バテア人が戦斗の場合に馬を使うのは不思議で、外の影響
を思わせる。

藏書家の親交

武 田 勝 藏

——新見正路と屋代弘賢——

戦災で焼失した藏書の中に、賜、蘆、文、庫、不、忍、文、庫、の印記のあ
るものが若干あつた。その印記の前者は昨今、再認識された遣
米使節新見正興の父正路のもの、後は上野の不忍池畔に文庫數
棟を持つていたと云う臨池堂主人屋代弘賢のものである。

過日、茅ヶ崎市舊家石田文吉氏の家藏の數百の先哲書翰の一
部を拜見中に、この兩人が藏書同好から親交があり、正路が弘
賢に教をうけている書狀が眼に觸れ、再び入手出來ぬ焼失の藏
書を追憶して感慨無量であつたので、左に掲げる。

一昨日者、相願候管、弦、目、録、早速御借被下忝奉存候、昨日營中
にて返上可仕處、御膳被爲進ニ而、御本殿え不罷出候間、今
朝返上仕候、延引御用捨可被下候、御歌いづれも感心仕候、
且、爲家卿家集爲御見被下忝奉存候、十八日迄御借可被下候
一後鳥羽院御集校合仕度、御藏本恩借之程希望候
一錦木はたてなからこそ朽にけれと讀る錦木は、いか様之形
ニ而候哉、古圖可有之奉存候、御教示被下度候
○星ひとつ見つけたる夜の嬉しさは、月にもまさる五月雨の
空

右讀人出所奉伺候、書餘期拜顔時候、頓首

二月十六日

正 路

屋 代 様